

発見された新たな記録

今泉の稲生神社

匠探訪

— 45 —

2月の年中行事として3日の節分が広く知られています。が、稲荷信仰の神社では、「初午（はつうま）」の行われるところがあります。

初午はその年の豊作を祈願する行事で、2月最初の午（うま）の日に行われます。

宗教法人に登録された市内66社のうち稲荷（いなり）・稲

生（いなお）神社は16社まつられています。今泉（野田地区）の稲生神社は昨年、本殿（神様をまつる場所）の改修と拝殿（神様に対しておまつりや祈願を行う建物）新築工事が行われた際、新たな記録が発見されました。

『野棠町百年史』によると、1615年（元和元年）大阪夏の陣に破れた豊臣家の残党・小川和泉守（いずみのかみ）が、京都の伏見稲荷大社から分霊勧請（ぶんれいかんじょう・神仏の分身を他の地に移し祭ること）し、この地に同社をまつたとあります。初めは別の場所にまつられたと伝わりますが、同村の小川和泉守、小川五郎兵衛らが現在地に移したとされます。

今回見つかった記録はこれを裏付けるかのように、本殿は1652年（慶安5年）に今泉村の小河理兵衛（小川利兵衛ともいう）が中心となり村びとの協力で建てられたこと、当時は「稲荷大明神」と

呼ばれていたこと、このほか観福寺と吉祥院の2か寺や野手村の大工の名も見られます。この本殿は市内の神社建築物の中では比較的古い年代に建てられたこととなります。

拝殿については、1782年（天明2年）に書かれた記録の一部も見つかったことで、230年ほど前に現在見られる境内の建物がそろったことになり、例祭もこのころには行われていたことでしょう。

神社を訪ねた1月15日は「ひげなで三杯」といわれる神事が行われました。工事報告書の中で、江戸時代の「稲荷大明神」がいつから現在の「稲生神社」となったか、という疑問が書かれていました。これは、明治初年に当時の県庁に提出した書類に「稲生大神」とあり、その後の県への報告記録などに「稲生神社」と称されているので同時期に変わったといえます。

明治時代中期から、建物修繕完成時や明治天皇の病氣平癒、大正天皇即位などに「神楽（かぐら）」を奉納したことで、この神社が時代とともに村びとの生活にとけ込んでいたことが知られます。

関八日市場図書館 館 73・3746



改修・新築された稲生神社の本殿と拝殿